

プログラム・ノート

寺西基之

毎年CMGの開幕を飾る「堤剛プロデュース」だが、今年は「プレシャス1pm」の公演を併せた2公演をととして、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)がチェロとピアノのために書いた全作品が取り上げられる。堤剛と小山実稚恵による円熟した、しかも新鮮さを失わないアンサンブルを通して、ベートーヴェンのチェロ作品の全貌が明らかにされることだろう。

6月1日(土) 堤剛プロデュース 2024

ベートーヴェン:

チェロ・ソナタ第1番 へ長調 作品5-1 / 第2番 ト短調 作品5-2

初期のこの2曲は1796年、ベートーヴェンがベルリンを訪れた際、プロイセン国王の御前でこの宮廷のチェロの名手ジャン＝ルイ・デュポール(1749～1819)と共演するために作曲された。2曲とも2楽章構成で、緩徐楽章を欠くが第1楽章に充実した緩やかな序奏が付く。18世紀後半の慣習に即してピアノが活躍する一方、2つの楽器が対等に渡り合う本格的な二重奏書法の追求もなされている点がベートーヴェンらしい。

第1番 へ長調は潑刺としたソナタ。第1楽章は雄弁な序奏の後、ソナタ形式の主部では2つの楽器が絡みつつ華麗に発展する。第2楽章は快活なロンドである。

第2番 ト短調は短調と長調の2つの楽章の対比を生かした情熱的なソナタである。第1楽章は長大な序奏に起伏に富んだソナタ形式の主部が続く。第2楽章は舞曲風の生氣溢れるロンド・フィナーレ。

『ユダス・マカベウス』の主題による変奏曲 ト長調 WoO 45

ベートーヴェンはチェロとピアノのための変奏曲を3つ残した。ジョージ・フレデリック・ヘンデル(1685～1750)のオラトリオ『ユダス・マカベウス』(1747)の中の合唱「見よ、勝利の英雄が来るのを」を主題としたこの変奏曲はソナタ第1、2番と同じく1796年にベルリンで書かれたようで、ヘンデル好きのプロイセン国王のためにヘンデルのオラトリオを主題としたと思われる。12の変奏でなり、第1変奏はピアノのみで奏され、続く変奏も概してピアノ主導の傾向があるが、書法的には性格的変奏に踏み込んでおり、コーダの途中では遠隔調の嬰ハ短調に達する大胆さもみせる。

モーツァルトの『魔笛』より「愛を感じる男の人たちには」による変奏曲 変ホ長調 WoO 46

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)のオペラ『魔笛』の中のパミーナとパパゲーノの二重唱「愛を感じる男の人たちには」を主題としたこの変奏曲は、中期へ向かう時期の1801年の作だけに、3曲の変奏曲の中でも特に充実した筆遣いが示されており、特にチェロとピアノを完全に対等に扱っている点に真の二重奏をめざす意図が窺える。コーダでハ短調の新主題が出現するのも斬新だ。

チェロ・ソナタ第3番 イ長調 作品69

中期のベートーヴェンは古典形式を拡大した劇的な様式を求めた。このソナタも中期の1807～08年の所産で、雄渾な楽想、チェロの幅広い音域の活用、2つの楽器が織り成すダイナミックな展開など、この時期の様式が如実に現れた傑作である。第1楽章はチェロ独奏が朗々と歌い出す第1主題に始まり、劇的な発展を織りなす。第2楽章は躍動的なスケルツォ。第3楽章は緩やかな序奏の後、2つの楽器が丁々発止にやり取りするソナタ形式の主部が続く。

6月4日(火) プレシャス1pm Vol. 1 ベートーヴェン:チェロ作品選

チェロ・ソナタ第4番 ハ長調 作品102-1 / 第5番 ニ長調 作品102-2

ベートーヴェンは後期に向かうにつれて古典派様式を離れ、内省的な幻想性を重んじる独自の作風を求めるようになる。1815年にチェロ奏者ヨーゼフ・リンケ(1783～1837)のために作曲された2つのソナタ作品102も、2曲全く違ったスタイルのうちにこの時期の作風がはっきり現れている。献呈はリンケでなく、彼とこれら2曲を共演したピアニストのエルデーディ伯爵夫人になされた。

第4番 ハ長調には後期への過渡期のベートーヴェンに特有のカウンタービレ重視の傾向が端的に示されている。構成も自由で、単一楽章とも2楽章構成とも見なし得る。2楽章構成と考えた場合、第1楽章は瞑想的な序奏の後、力強い急速なソナタ形式の主部が続く。第2楽章は幻想味を湛えた緩徐部分に始まり、前の楽章の序奏の回想を挟んで、ロンド・ソナタ風の自由な形式による軽妙な主部が発展する。

第5番 ニ長調は3楽章構成の地味ながら深い内容を持つソナタである。第1楽章は堅固な造型の中に奔放な力強さを湛えたソナタ形式楽章。第2楽章は瞑想的な性格と浄化された音調が印象的。第3楽章は軽快な主題に基づく入り組んだフーガが展開、途中で新主題も提示され、壮大な二重フーガで力強い高揚を示す。

モーツァルトの『魔笛』より「恋人か女房か」による変奏曲 へ長調 作品66

作品66という番号からは中期の作のように思えるが、初期の1796年(異説あり)に書かれた変奏曲。主題はモーツァルトのオペラ『魔笛』のパパゲーノのアリア「恋人か女房か」で、ピアノのみの第1変奏以下12の変奏が続くが、曲が進むにつれて性格的変奏の色合いを強めていく。全体に軽妙さが支配するが、それだけに短調のシリアスで緩やかな第10、11変奏が気分の変化をもたらすのが効果的である。